
杜ノ宮高校ゴーストバスター部

佐野和水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杜ノ宮高校ゴーストバスター部

【Nコード】

N7515Y

【作者名】

佐野和水

【あらすじ】

「君は素質があるようだな、来たまえ」

昼休みに入るとすぐに、俺は見事に拉致られた。

首謀者とは面識がある。登校時に会った「昭島真綾」だ。

プロローグ：今日から始まるゴーストバスター

【プロローグ：今日から始まるゴーストバスター】

「さあ三鷹君、思いつきやりやってしまいなさい」

まったくヤル気のない俺とは対照的に、元気いっぱいテンションMAXで昭島先輩が鼻息荒く騒いでいた。

いつもの事だ。

「先輩、こんなので本当に効くんですか？」

「効くさ、我が家の近所にある神社で清めてもらったからな」

こんなのと俺が持つている一枚のA4用紙の事である。ついさつき、企み笑顔の昭島先輩から渡された「除霊グッズ」だそうだが得意気に腕組みをし、昭島先輩が俺の横に立っている。その紙を使うのを今か今かと待ちわびた様子で、身を乗り出して「対象物」を食い入るように見つめている。

「……え、えーい！！ 悪霊退散ーっ」

俺はその紙を小さく丸めてから「対象物」目掛けて投げつけた。

命中、……除霊グッズを使ったわりには派手さがないなあ。

「ほほう、やれば出来るじゃないか。その調子で、どんどん練習をしてくれ」

昭島先輩からお褒めのお言葉を頂いたのだが、こんな怪しさ満点の行為を褒めてもらっても、正直嬉しくない。

「あのお先輩、もういいですかあ？」

「ああ、ありがとう清瀬君。素晴らしい霊役だったゾ」

「そうでもないですよ、えへへ」

部屋の隅で座り込んでいた「対象物」役だった清瀬美咲が立ち上がった。美咲は俺の幼なじみで、昭島先輩のお気に入りの人だ。

それにしても美咲よ、それは褒め言葉ではないよ思うぞ。

「みなく〜ん、どうだった？ 私の霊役？」

「ん？ どうって言われても、だなあ……」

「清瀬君、そんな事は三鷹君には分からないさ。なにせ、座った事で見えていた清瀬君のパンツばかり見ていたのだからな。そうだろう？」

「な、何をいつてるんですか！？ 見てないですよ」

「せんぱあい、見えてたなら教えてくださいよ。みなくんにそんなサービスするのもつたいないじゃないですか」

お前はパンツを損得勘定で露出の是非を決めるのか？

美咲は少し顔を赤く染めながら、投げつけられた紙を拾う。そしてそれを広げると、舌を出しながら俺に突きつけてきた。

大きく「散れっ！！」と書かれているだけの紙。まるで俺に対しての主張のようだ。

「せんぱあい、こんなので本当に退治出来るんですか？」

「君達は疑り深いなあ。それなら即実戦に連れて行き三鷹君に使用してもらおうぞ？」

「俺だけえ？ なんで自分で使わないんですかあ！！」

「安心したまえ。初めは痛いですがすぐに慣れてくる、二回目からは痛くない。最初だけ我慢すれば、後からは快樂の波に身を委ねるだけでいいのだよ」

「なにか、エロい事になってますけど……」

最近になって、ようやく昭島先輩の扱い方が分かってきた気がする。ツツコミを入れずに軽く流せばいいのだ。全てにツツコミを入れてたら、右の手首が腱鞘炎になってしまいそうだからな。

昭島先輩は強いツツコミが返って来なかった事に少々不満のようだが、小さくため息を吐くとすぐにいつものキリツとした顔立ちに戻った。

「さあ、気を緩めない！！ 相手は霊、こっちの都合なんてお構い無しにやってくるんだよ。しっかり練習して、実戦に備えていなさい」

昭島先輩にはこんな姿がよく似合う。容姿端麗、才色兼備、秀外

恵中、カリスマ性も高く、「理想の上司No.1」に選ばれそうなほど、人の上に立っているのがサマになっている。

「いつでも対応できる様に準備は必要よ。勝負下着にゴム、最低限これだけは所持していなさい」

「……って、なんでそこでエロい話になるんですかあ!？」

思わず全力でツツコミを入れてしまった。

おかげで昭島先輩は鼻を少し膨らませ、得意気な表情になっている。

「相変わらず君は分かっているいな。勝負下着は「責め」を表し、ゴムは「守り」を表しているんだよ。これだから男子は困るんだよ、なんでもエロく考えて……」

あなたに言われたくありません!!

ダメだ、この人に係ると異常に疲れてしまう。どうしてこんな部に入ったんだろう？

……おいおい美咲さん、何メモってるんでしょうか？ そんなに大事な内容、今の会話になかったはずだろ？

「私は攻撃重視でいたいタイプです。だから、ゴム無しでがんばります」

突然すごい決意を大声で言い放ったのは、椅子に座ってラノベを読書中であつた奥多摩千尋さんだ。普段は無口なんだが、テンションが上がってくると止まらなくなるらしい。

それでも一応、俺の憧れの女性なのだ。

深く理解していない事を願うばかりである。

「いいねえ、奥っち。その意気込みは大事だよ」

昭島先輩はとても満足したようで、再びテンションMAXとなつて目を輝かせ始めた。

そして、必然的かの様に部専用のケータイがメールの着信を知らせてくれた。

もちろん着メロは、あの「ゴーストバスターズ幽霊退治映画」のテーマ曲だ。

「いいタイミングだねえ。さあみんな、出勤だよ」

昭島先輩の声と共に、みんなに一瞬の緊張と高陽感が走った。そして慌てて自分の武器（エモ）を手にとって準備を始めた。

俺の武器は……A4用紙だ。なんとも頼りない。

「みんな、武器は持った？ 準備はいい？ 一緒にイクよ？」

こんな時まで下ネタですか……、とツツコミを入れたかったが、今はよしておこう。多分俺以外は気付かない下ネタだからな。

みんながみんなの顔を見て、自然と笑顔になっていた。みんなのドキドキとワクワクとが混ざり合ったような、心地良い一体感だ。

円陣を組んだ俺達四人は、中心で右手を重ねて昭島先輩の掛け声を待った。

「行くよ！ We are ゴーストバスター部！！！！」

これが俺の記念すべき初出勤であり、後悔に満ち溢れたスクールライフへの第一歩でもあった。

柱の上の副会長

【 柱の上の副会長 】

高校に入学したというのに、俺達の登校風景は中学時代と大きく変っていない。

変わった点は、登校する道と制服くらいだ。

入学式も終わり、いよいよ今日から高校生活最初の授業が始まるワケなのだが、俺は中学時代と変わらずお隣さん家の玄関先で一時停止を食らっている。

お隣さんは、清瀬美咲きよせみさきの家だ。

美咲とはちっちゃい頃から色々知ってる「幼なじみ」なのである。

家はお隣同士で同じ誕生日。これは運命を感じてしまう……のだろう、親達は。

当の本人達は、兄妹みたいな関係になっちゃったけど。

「お待たせ、みなくん。今日からお弁当だって事忘れてて、慌てて作っちゃった」

美咲は髪をブラシで梳かしながら現れた。そして「ほいつ」と見慣れた巾着を差し出してきた。

俺の分の弁当だ。

「ん、あんがと」

俺は少し無愛想に言う。

いつもこうだ。いつになっても小っ恥ずかしくなってしまう。この「幼なじみが毎日お弁当を作ってくれる」という現実。

どこのラノベの世界に迷い込んだのだろうか？。

「ねえ、みなくん。部活はどうする？ やっぱり美術部は諦めるの？」

「うーん、諦めたくなんだけどねえ。親父が許してくれないからな」

俺の家は親父と俺の二人家族だ。母親は俺が十歳の時に交通事故で亡くなっている。奇しくも親父が交通機動隊の警察官だということ……。

なので親父が男手一つで俺を育ててくれている、だから出来るだけ親父の意見には逆らわない様にとしている。

美術部に入って美大に進学し、芸術関係の仕事に就きたいのだが、親父の希望は自分と同じ「警察官」なのだ。

「今時いいよな、人の為にならない仕事に就くな」とか言う親父はいつもこう言うのだが、やはり内心では「仕方のない事だ」と諦めている。

恐らく美咲も、俺の内心に気付いているのだろう。いつも「そーだねえ」と笑顔で俺の話を聞いてくれる。

結局、中学時代と大きな変化もなく、俺は今まで通り美咲と一緒に登校する事となった。

線路沿いの道から右に曲がり、学校正門へと伸びる道へ入ってきた途端、美咲は慌て始めた。

「みなくん、正門で誰かが挨拶してる。生徒会の人かな？ 制服チエックとかもするのかな？」

美咲の言うように正門では、生徒会らしき人達が登校してきた生徒達を挨拶で出迎えている。

俺の後ろに隠れた美咲は、スカートの丈を気にしたり、「前髪長すぎないかな？」など聞いてきたり、心配になってその場から一歩も歩き出さなくなった。

「大丈夫だつて。今時それくらいの格好なら生徒会の生徒だつてやってるんだから」

俺は落ち着かせようと声をかけたのだが、心配性の美咲は「身だ

しなみ確認」に夢中になっている。

このままだと遅刻しそうなほど立ち止まるんだろ。多少強引ではあるが、美咲の手を掴んで無理やり歩かせる事にした。

「ちょ、ちよつと待って。みなくん……あれ何？」

美咲はグツと踏ん張って抵抗しながら、前方の正門を指差す。

「何って、正門だ……る？」

そこには驚きの光景があった。最初に見た時は遠くて気付かなかったのだが、ここまで近付くと「何コレ？」ととんでもない違和感を覚えてしまう。

誰か、写メでも撮ってテレビ局に投稿してみたらどうだろうか？

採用されたら三万円貰えるぞ。

「みなくん。あの人、どうして正門の柱の上に立ってるんだろ？」

俺が賞金に目が眩みそうになっていると、掴んだままの俺の手を握り直して美咲が尋ねてきた。

どうして？ と聞かれても、分かるはずないって。あんなトコに立つ人の気持ちなんて知るワケがない。

「と、とりあえず……行こう」

その人は右側の柱の上に立っている、なので俺達はなるべく左側を通る。

正門付近はガヤガヤと騒がしい様子だ。柱の上のその人を避けて左側を通る生徒が多いのだが、そのほとんどが一年生。二年生や三年生は「いつもの事だ」という感じで普通にスルーして登校している。

「ねえ、あの人。キレイだよ……」

グイグイと美咲が俺の手を引っ張り、その場に立ち止まった。振り向くとボンヤリとした表情で見上げる美咲、その視線の先には柱の上で仁王立ちする生徒会役員の姿だ。

確かに言われてみれば、とても綺麗な顔立ちをしている。

やや丸みのある小顔、そのおかげでパッチリとした瞳がより一層大きく見える。そしてショートヘアがとても似合っている。短いス

カートから伸びる足は、きめの細かい白い肌で思わず見入ってしまった程だ。

あんな所に立っていないければ、と思うと実に残念である。ふっと俺は視線を落として美咲を見てみる。

なんだろう、この「おこちゃま体系」は……。こっちも残念である。

「おい、その一年生」

その声には俺は顔を上げると、声の主と視線が合ってしまった。声の主は、あの柱の上にいるミニスカ生徒会役員だ。

「スマンが今日は縞パンではないので、あまり見ないでもらえるか？」

「縞パンだったら見られてOKなのかよっ」と思わず大声でツッコミ入れそうになるが、初対面の上級生なので我慢だ。

そんな俺の表情を読み取ったかのように、その柱の上の生徒会役員は少し微笑んでくれた。

そして再び仁王立ちとなり、登校してくる生徒達に腕組みしながら挨拶をし始めた。

「みなくん、パンツなんて見ようとしなさい!!」

美咲はそう言うのと俺の腕をグイグイと引っ張って、どんどんと進んで行く。

俺は周りの生徒達から笑われ者にされながら、足早に教室へと逃げ込むのであった。

「聞いたよ湊人、生徒会副会長のパンツをのぞいたんだって？ 念願の高校デビューだね」

昼食の時間、俺の対面に座って一緒に弁当を食べている小笠原亮おがさわらあきらがそんな事を言い出したおかげで、大好きなから揚げを一つ落としてしまう結果となった。

「いやいや、違つだる亮あ。高校デビューつてなんだよ。俺はただ……副会長つて、あれが？」

「そう、副会長。姉ちゃんが怒つてたよ、三鷹君が副会長のパンツに見とれて私に気付かなかつたつて」

「見とれてたワケじゃねーよ。いや違つ、見てたワケじゃねーんだよ……！」

亮の姉はこの杜ノ宮高校の生徒会会長だ。中学生時代に亮のウチに遊びに行くと、よくお菓子などを持ってきてくれてた、実に好印象なお姉様だ。

「昭島真綾副会長。姉ちゃんが生徒会会長を引き受ける条件が、昭島先輩の生徒会役員への起用だつたつて聞いた」

「あの人……、そんなに期待出来る人材なんだろうか？」
なにせ、あんな光景を見たんだ、疑うのは当然だろう。

「昭島先輩、キレイだつたる？ 成績もいいしスポーツ万能だし、ファンも多いみたいだよ。確かに変わった人だと思うけど、湊人が頑張つても敵わない程の人材、つてのは事実みたい」

亮は箸先を俺に向けてそう言つた。なぜか妙な熱がこもっているが、亮もあの先輩のファンなんだろうか。

それにしても、あんな変わった人に敵いたくないな。

「あと、姉ちゃんから伝言があつた。「守つてあげられないみたい、ゴメンね」、だつて」

「……守つてあげられないつて、なんだろう？ 俺、そんな約束したかな？」

「知らないよ、僕に言われても」
「そうか」

そこで会話が途切れたので、俺達は再び弁当を食べ始めた。

床に転がっているから揚げが視界の中に入って、拾っていない事を思い出した。

大好きなから揚げを落としてしまった事が、何かの暗示だつたと

気付くのは一日過ぎたからだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7515y/>

杜ノ宮高校ゴーストバスター部

2011年12月1日22時01分発行